

カトレア・サービス  
さくら・きくいしばた

# 研修報告

さくら：〒457-0026 名古屋市南区見晴町 1-15 TEL:052-811-2949,825-5562,824-0296 arch-sakura@2949n.com  
 きくい：〒451-0044 名古屋市西区菊井 1-10-10 TEL:052-581-2949・2943 arch-kikui@2949n.com info@2949n.com  
 しばた：〒457-0814 名古屋市南区柴田本通 2-1-1 TEL:052-613-2949・2944 arch-shibata@2949n.com

子育て応援講習会～命を育てているあなたに伝えたいこと～

日時：2019年1月24日（木） 主催：みなみ子育てネット

講師：清水ユカリさん（出張専門助産師） 参加者：平松

今回の研修は主に、小中高生にどのように性や命の話（思春期セミナー）をしているのか、命がどうつながっているのかを学ぶことのできる研修でした。参加者は主任児童委員さんや現在子育て中のお母さん、子育てに関わる仕事をしている方、保育園の先生などです。清水さんはとても柔らかい話し方で、性や命の話をわかりやすく、子どもたちにどのように伝えれば伝わるのかをお話してくださいました。

思春期セミナーでは助産師の仕事、命のはじまり、胎児の成長の様子、思春期を迎えて大人になるということなどのお話をされているそうです。

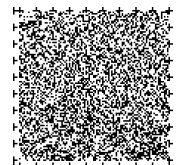
今回の講演の始めには、赤ちゃんのもとである卵子の大きさを1人1人が確認しました。1枚の紙が配られその紙を明かりに透かしてみると、本当に小さな小さな丸のような点のようなものが見えました。これが命のはじまりであることを小中学生に伝えているそうです。卵子や精子の模型やおなかの中の様子（胎盤や胎児）の模型を使って、命のはじまりをわかりやすく説明して頂きました。思春期セミナーを行う際、清水さんは必ず子どもたちに『みんなが産まれてきたときお父さん、お母さんは「待っていたよ」と思うのだよ』と伝えていると何度か話してみえました。子どもたちが自分を大切に成長していけるように、産まれてきてくれてありがとうの気持ちを伝えているのです。研修を受講していた現役のお母さん達にも「お



子さんが産まれてきたときの気持ちをお子さんに伝えてね。」とおっしゃって見えました。

小学生には赤ちゃんが生まれるまでをお話しするそうです。中高生には、生まれてから成長する中で思春期や青年期の話をしていくそうです。思春期では【親友・彼氏・彼女】ができます。大切なことは大切な人と【対等】な関係にいるのだよ。と教えているそうです。嫌なことを嫌と言えること。また、身体と心が大人になっていくと脳からホルモンのシャワーがでることも伝えるそうです。『初経・精通・月経・射精・夢精』、20後半～40代の現役のお母さんたちは自分たちの子どもの頃は、異性の性のことは学ばなかった記憶…と話していました。現在は一緒に学ぶそうです。同時にLGBTの話もすることが増えたとのこと。性や命の話は話しにくさがまだまだありますが、【うそをつかない】ことが大切で、まだ話すのに早いなぁと思う内容は「大人になったら話すね」と伝え適切な年齢になったらきちんと話すことが大切だと学びました。

思春期は子どもから大人へと成長する大切な時期です。女の子は比較的お母さんに相談できているようですが、男の子はなかなか相談できず曖昧な知識になってしまいがちできちんと伝えていくことの大切さも学びました。助産師会への子どもからの性の相談電話は9割が男子からだそうです。



今回の研修では、命のはじまりから誕生まであらためて考え、感じる1日でした。先生は命の研修を「命のバトン」とまとめてみえました。多くの命が繋がって、この命が存在するのも奇跡。そしてこの命はバトンをつなぐ大切な命。何気ない毎日に感謝し、命の大切さを実感しました。子どもたちにも伝えていきたいです。産まれてきてくれてありがとう。自分を大切にしていこうね。(平松智子)

スタッフ研修 「虐待について考える～日々の支援をふりかえろう～」  
日時：2019年1月21日(月)  
参加者：赤崎、堀田、平松、小澤、安田、服部、溝口、田川、松本は、鳥居、曾根田、水野、福井、安井

自分が働いている事業所のスタッフによる虐待をテーマに研修を行いました。普段子どもたちと関わっている中で、自分の行動や言動について自己チェックシートを用い日々のふりかえりを行いました。自己チェックをしている中で、どこまでは良しとされるのか、どこからが良くないのかの境界が曖昧なものもありました。叩くことや蹴ることは誰から見ても虐待です。では、どこまでが見守りになり、どこからが本人の訴えの無視になってしまうのか。帰りの時間だからといって抱っこで途中まで連れて行ってしまおうのが身体拘束(本人はしたくないのにやらせる)になってしまうのか。などが曖昧なものとして挙がりました。スタッフ間で話し合いをし、今この子にはこの部分を頑張ってもらいたい、この子の見通しがつく場所までは抱っこで連れて行くなど決めておく必要があります。



そして、その内容については保護者とも話し合い支援していきます。境界線が曖昧なものこそ話し合いをして支援の方法を検討していかなければならないものであるということを改めて気付かされました。

また、虐待の判断の仕方としては虐待をしているという意図や、被虐待者本人の認識は問いません。虐待で一番多いのがみんなから好かれている人が、虐待か否かの境目がわからなくなってしまっていることが多いということでした。支援する側の精神的な余裕がとても大切で、「あれも、これもしなくちゃ」と余裕がなくなってしまうことが、支援者だけでなくご本人にとっても良くないです。物事を客観的に捉えるためにも、適度な余裕を持って支援に向き合うことが大切だと改めて感じました。

グループワークでは自己チェック表をもとにグループに分かれて話し合いをしました。人それぞれに支援の幅があり、その幅はとても大切です。ですが、個々の支援については人によって支援方法が違っていると子どもが混乱する原因になってしまうため、スタッフ間で話し合いをして一定の関わり方をすることが大切です。疑問に感じたら、これでいいのかな？と探りながら支援をしてしまうのではなく、話し合いを行うことが必要に感じました。

話し合いの中で、家族がそこまでしなくても思っている支援者側が「ここまではやらなければいけない」と思い込みすぎていることもあるという意見も出ました。支援者側の認識で対応してしまわないよう、家庭との連携がとても大切です。「やらなくてははいけない」が子どもの負担になっていることもあります。本人を交えて家族とともに話し合うことが過度な負担を生じさせないことに結びついていくのではないかと思います。

今回の研修で、話し合うことの大切さを実感しました。また、「自分がやらなきゃ」という強迫意識に陥らないことが大切です。チームで支援をしているので、ここはこの人が得意だからお願いしよう、今この人が大変そうだから手伝おうなどと、気持ちに余裕を持った連携を上手に行うことでより良い支援につながると感じました。(安井由香)

